

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月19日現在

機関番号：82611

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K19793

研究課題名(和文) 保護要因に焦点を当てた暴力リスク・アセスメント・ツールSAPROFの有用性の検証

研究課題名(英文) Verification of the usefulness of the Structured Assessment of PROtective Factors for violence risk (SAPROF) which focused on the strength-based protective factors.

研究代表者

柏木 宏子 (Kashiwagi, Hiroko)

国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・病院・医員

研究者番号：90599705

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：医療観察法病棟に入院していた者を対象とし、暴力リスクの保護要因評価尺度SAPROF日本語版の、評価者間信頼性(評価者による一致度)と予測妥当性(将来の暴力の予測の精度)を検証した。その結果、良好な評価者間信頼性と、良好な予測妥当性(評価後半年以内と1年以内の暴力に対する予測)が得られた。さらに、暴力の保護要因に対する当事者の視点と専門家評価との相違点を調査した。当事者は、専門家と比較して、人生の目標と治療への動機付けは高く(あると)、保護の強さは高く、リスクは低いと評価し、暴力を防御するための今後の重要な目標は、仕事、人生の目標、親密な関係(婚姻や交際)を選択したものが多かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

暴力リスクをアセスメントする際には、リスクや問題点にばかり焦点が当てられていた。近年は、リスクを代償する要因、ストレンクスに着目した保護要因が注目されるようになり、より前向きで治療的な視点が提供され、当事者と支援者の両者のモチベーションを高める可能性が期待されている。本研究では、暴力の保護要因を評価するSAPROFの有用性について検証した。また、当事者自身の保護要因についての視点と専門家の視点との相違点が明らかとなった。お互いの視点を学ぶことで、共通の目標を設定し、治療同盟構築に寄与できる可能性がある。日本の司法精神医学においても保護要因の考え方が普及することに貢献した。

研究成果の概要(英文)：We verified the inter-rater reliability and predictive validity of the Japanese version of the SAPROF (Structured Assessment of PROtective Factors for violence risk) for inpatients under the Medical Treatment and Supervision Act. The results showed a good inter-rater reliability, and a good predictive validity (prediction of violence within six months and within one year after the assessment). We also used the SAPROF Interview Self-Appraisal to conduct investigations from a service-user perspective on protective factors for violence, and examine the points of difference with assessments by professionals. Compared to the professionals, the service users rated life goals and motivation for treatment highly(present), and assessed the strength of protection as being high and risk as low. Moreover, in regard to important objectives from hereon to protect against violence, many of the service users selected work, life goals and an intimate relationship (marriage or being in a relationship).

研究分野：司法精神医学

キーワード：暴力 リスクアセスメント 保護要因 SAPROF 予測妥当性 医療観察法 当事者参加型 ストレンクス

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまで、暴力のリスク要因に関する知見は著明に増加しているが、リスク要因を代償する側面、保護要因に関しては、関心が向けられてこなかった。暴力の保護要因の同定は今後の主要な課題とされている。保護または代償要因が考慮されなければ、リスク・アセスメントは不均衡となり、不正確な予測に至る。保護要因は、将来の暴力行為のリスクを軽減する、個人の特性、環境、および状況と定義されている。リスク要因の減少に目を向けるだけでなく、保護要因の強化にも目を向けるべきである。また、保護要因を評価する意義として、治療やリスク・マネジメントのガイドラインになりうることや、当事者及び治療チームの動機付けとなることが期待されている。SAPROF (Structured Assessment of PROtective Factors for violence risk) は暴力リスクの保護要因評価ガイドラインであり、オランダで開発され、申請者らにより日本語版が作成され、逆翻訳を経て、公開された。17項目があり、内的要因(知能、幼年期の安全な愛着形成、共感性、対処能力、セルフコントロール)、動機付け要因(仕事、余暇活動、金銭管理、治療への動機付け、権威に対する姿勢、人生の目標、服薬)、外的要因(ソーシャルネットワーク、親密な関係、専門的ケア、生活環境、外部からの監督)に分けられている。「知能」と「幼年期の安全な愛着形成」のみ静的要因であるが、他の項目はすべて動的要因から成っている。SAPROF 日本語版の評価者間信頼性と予測妥当性、ならびに当事者と共有することの意義については明らかにされていなかった。

2. 研究の目的

SAPROF 日本語版の評価者間信頼性と予測妥当性を明らかにする。

暴力リスクの保護要因を当事者にインタビューし共有することの有効性、専門家の視点と当事者の視点の違いを明らかにする。

3. 研究の方法

医療観察法病棟に入院していた者を対象とし、暴力リスクの保護要因評価尺度 SAPROF 日本語版の、評価者間信頼性(評価者による一致度)と予測妥当性(将来の暴力の予測の精度)を検証した。2008年4月から2012年11月までに1年以上入院した対象者の過去の診療録等を参照し、入院後2週間の時点でのSAPROFを評価した。評価者間信頼性については、30例を2名の評価者で評価し、ICC解析を行った。予測妥当性については、入院後6カ月間、1年間の暴力の発生の有無をアウトカムとし、ROC曲線で解析した。

また、全国の医療観察法病棟12施設による多施設共同研究による前向きコホート研究を実施した。入院中の者を対象として、保護要因に焦点が当てられたSAPROFとリスク要因に焦点が当てられたHCR(ヒストリカル・クリニカル・リスク・マネジメント)-20-Version3を評価し、評価時点から1年間の暴力の予測妥当性を調査し、解析している。

さらに、SAPROFを使用して、暴力の保護要因についてどういった強みがあるか当事者にインタビュー(共有)することの効果と有害事象、当事者評価と専門家評価との相違点を明らかにする研究を実施している。SAPROFをインタビュー(共有)する前後で、健康の統制に関する考え方、内発的動機付け、一般的自己効力感、抑うつ、不安、PANSS、怒り、攻撃性、衝動性を評価し、介入群と対照群とで比較する研究を進めている。また、SAPROF17項目を0,1,2の3段階、ならびに総合的な保護のレベルとリスクのレベルを5段階で評価し、専門家と当事者の評価の相違点と一致度をt検定ならびにICC解析で検証した。さらに、暴力を防御するための、現在ある強みの中で最も重要なものを3つ、また、今後の目標となるものを3つ選択してもらい、SAPROF以外の価値ある保護要因についても尋ね、それらについても当事者と専門家の視点の違いを調査した。

4. 研究成果

医療観察法病棟に入院していた者を対象とした、後方視的コホート研究においては、良好な評価者間信頼性(ICC=0.70)と、良好な予測妥当性(6ヶ月:AUC値=0.87 12ヶ月:AUC値=0.85)が得られた。

多施設共同研究による前向きコホート研究については、解析途中である。

保護要因をインタビューする研究においては、効果と有害事象については検証中。当事者の視点については、当事者は、専門家と比較して、「人生の目標」と「治療への動機付け」は高く(あると)評価し、保護レベルは高く、リスクは低いと評価していた。評価の一致度については、外的要因とセルフコントロールは一致しやすいが、他は一致しない要因が多かった。また、暴力を防御するための現在の強みの中で最も重要なもの、今後の目標で最も重要なものを選択してもらった結果、当事者の関心事が、「人生の目標」、「仕事」、「親密な関係(婚姻や交際)」であるのに対して、専門家は、より疾病理解や治療、観察に関わる項目に関心が向けられていた。その他の価値ある保護要因については、「人の役に立つこと」、「生き物を飼うこと」、「スタッフが明るいこと」、「信頼」、「規則正しい食事」、「戦争がないこと」、「WRAPの道具箱」、「お菓子作り」、「料理」、「スポーツ」などが挙げられた。前向きなアセスメントの中では、当事者が率直に意見を述べ、強みのみならず課題についても言及した。暴力の保護要因について、当事者と専門家には視点の違いがある可能性が示唆された。当事者と支援者が互いの視点を学ぶことで、共通の目標を設定し治療同盟が構築されやすくなる可能性もある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

Hiroko Kashiwagi, Akiko Kikuchi, Mayuko Koyama, Daisuke Saito, Naotsugu Hirabayashi. Strength-based assessment for future violence risk: a retrospective validation study of the Structured Assessment of PROtective Factors for violence risk (SAPROF) Japanese version in forensic psychiatric inpatients. Annals of General Psychiatry 2018 Jan 30; 17:5 1-8. [doi: 10.1186/s12991-018-0175-5](https://doi.org/10.1186/s12991-018-0175-5)

〔学会発表〕(計5件)

暴力の保護要因(SAPROF)をインタビューする意義 ストレングスに着目した、当事者参加型のアセスメント法の開発 柏木宏子 梅垣弥生 山田悠至 竹田康二 山下真吾 大森まゆ 平林直次 第15回日本司法精神医学会大会 2019年6月8日

暴力リスクの保護要因について—SAPROFの紹介— 第11回司法精神科作業療法全国研修会 2017年12月10日 11日 柏木 宏子

柏木 宏子. 「暴力リスクの保護要因について—SAPROFの紹介」精神障害者の暴力リスクをどのように評価するか—国内外の最新研究から, シンポジウム, 第113回日本精神神経学会学術総会 2017年6月 名古屋

暴力リスクの保護要因について—SAPROFの紹介— 第10回司法精神科作業療法全国研修会 2016年12月10日 11日 柏木 宏子

Michiel de Vries Robbe, Hiroko Kashiwagi, Aika Tomoto, Akiko Kikuchi. SAPROF (Structured Assessment of PROtective Factors for violence risk) workshop. The 12th Annual Conference of the Japanese Society of Forensic Mental Health. June 19, 2016

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年:
国内外の別:

〔その他〕なし
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者 なし

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。